

一 般 演 題 抄 錄

25. 術中大量出血症例の麻酔管理と予後に関する検討

坂口雅彦 口分田理 泉 貴文
土屋典生 田倉 学 二川晃一
森田 博 初岡和樹 竹村光博
古賀義久

近畿大学医学部麻酔科学教室

術中大量出血を伴う症例の麻酔管理は非常に困難である。ショック状態が長く続いたケースでは、術後にも重篤な合併症を伴う事が多くその予後に大きな影響を与える。今回、我々は術中100 ml/kg 以上の出血をきたした大量出血症例に対し、術中・術後管理および術後の合併症と予後との関連性について retrospective に検討した。

対象は1989年3月から1994年3月までの人工心肺使用症例を除く過去5年間に於ける術中100 ml/kg 以上の出血症例で、術後、生存群と死亡群とに分類し、各項目について検討した。症例数は32例で、部位別例数は、消化器手術23例、大血管手術6例、泌尿生殖器手術、頭頸部手術、四肢手術が各1例であった。

全症例数32例中、生存16例、死亡16例であり、大量出血を来す症例では死亡率が50%であった。

我々の術後合併症における対象検討項目の中で

は、尿量、術中最低 pH 及び BE が、生存群に対して死亡群が有意に減少を示した。一方、死亡群におけるショック時間、循環不全、腎不全、および DIC は、生存群に較べて有意に増加した。術後合併症として呼吸、循環、腎、肝不全、DIC がそれぞれいくつか合併することにより予後が悪くなり、特に、術中での尿量の減少が腎不全を誘発して多臓器不全へ発展し、死の転機をとるものが少なくなかった。術後の予後に影響する因子として、出血量を手術時間で除した出血速度が速いほど死亡率が高く、量よりも速度が重要な因子になると報告されている。術中大量出血症例で予後不良な原因として考えられるものは、高齢者、術中ショックが遷延した症例、代謝性アシドーシスが進行した症例、尿量が少ない症例等で、症例の中でも腎不全の合併が死因率として最も高く、術中・術後の腎機能保持が、今後特に重要であると考えられた。